

占星術師と男の客

その男が通り過ぎるのはこれで4回目だと占星術師は思った。

書物に目を落としていたので、顔は見なかったが、仕立ての良さそうな紺のカシミヤのコートに、アイロンがきちんとかけられたグレーのウールのズボンが、右からやって来て通り過ぎたかと思うと、数分後にはまた同じコートとズボンが左からやって来る。そして数分たち、こんどは右からやって来て、いまはまた左からやって来た。

地下1階のフロアだが、占星術師が陣取る占いブースの左手には、通りから階段を下って入る半地下状のエントランスがあり、そこからも客は大勢出入りするが、このファッショ

ンビルのテナントのほとんどが女性向けのファッションブランドだ。この地下のフロアに入るテナントも若い女性向けの比較的安価なブランドや雑貨店だったし、占星術師の目の前のなじみのショップも傘やスカーフやバッグなどの婦人雑貨が専門だ。つまり、身なりのよい男性がひとりで占星術師の前を行ったり来たりするのは、彼が占いの前に腰かけるのを躊躇しているからであることに間違いないのではないのだ。実際、そういう男性客は少しも珍しくない。そのときは、いつもこちらから声をかける。

さあ、次は右からやって来るぞと、スキンヘッドの中年占星術師は読んでいた書物をパタンとたたんで脇にどけ、黒のタートルセーターにスタンドカラーの黒のジャケットという牧師のような出で立ちを、糸くずを取るなどして整え、居住まいを正した。

案の定、右手から白髪交じりの、スーツに紺色のコートを着た男が、こちらをチラチラとうかがいながら、ゆっくりと歩いてきた。

「旦那さん、お座りなさい」

そう占星術師が言うと、男はわざと驚いたような表情を浮かべ、右手の人さし指で自分の胸を指した。

「そう、あなたです。どうぞ」

男は少し逡巡したが、あるいは逡巡したふうを装ってから、占星術師とテーブルを挟んでパイプ椅子に腰かけた。

「人に見られたくなければ、あなたの後ろのカーテンを閉めてもいいんですよ」

男は座ったまま首だけ動かして振り返り、窮屈そうに腕を伸ばして赤いビロードのカーテンをサーッと音を立てて閉めた。

中肉中背というよりは、やややせ気味で、細いあごに通った鼻筋、ギョロリとした目が落ち着きなく動いている。おそらくゴルフ灼けだろう浅黒い肌には張りがあり、しわも少なく、年齢不詳の若々しさがある。商売柄、ひとの年齢はほぼ見ただけで見当が付くから、五十代後半だろうと思ったが、白髪がなければ四十代でも通用するにちがいない。

とはいえ、薄い唇の上に浮かぶ暴力性は、この男がタクシーの運転手に「運ちゃん、あそこ行け、ここ行け」と威張り散らすタイプだということを物語っていると占星術師は思った。きつと自分にも居丈高な言葉遣いをするに違いない。

男はコートのすそをパンパンと払い、ブルーのネクタイを少し緩め、フーツと息をひとつ吐くと、腿のうえで両手を組み合わせた。

男はそれからおもむろに右手をテーブルの上にのせると手のひらを上に向けて広げ、ア

ゴをしゃくるように動かした。占え、というジェスチャーだろうか。

占星術師は、あまりにも思った通りの振る舞いに笑いを堪えつつ、穏やかな声でこう言った。

「何を占って欲しいんですかな」

男はためらうことなく、こう言った。

「適性だ」

細い首に似合わない太く低い声だった。

「適性？ 職業の、ですか？」

男は無表情でうなずいた。

「まさか、これから職を探すというわけでもありませんまいに」

男は無表情のまま、急かすように右手をひらひらと上下に動かした。

「わたしは手相も見ますが、適性などでしたら、占星術のほうがよくわかります。誕生日は？」

「星占いは好かん。あれは子供だましじゃないか」

「いや、星占いではありません。西洋占星術です。十個の天体を使って占います。その天

体の組合せは無制限通り。きょうの牡羊座のラッキーカラーは緑色、なんていうのとは次元が違う」

男はじつと占星術師の顔を見つめてから、「4月7日」と答えた。

「何年ですか？」

「昭和30年」

「ええと、1955年ですな。生まれた時間は？」と占星術師はかたわらのノートパソコンになにやら打ち込みながら聞いた。

「生まれ時間？ そんなもん、知らん」

「時間がわからないと、正確性は半分に落ちます。ご自分の母子手帳などはお持ちですか？」

「母親が知ってるだろう」

「じゃ、いま、電話なすって、生まれた時間をお聞きください」

「そんな面倒なんだったら、もう、いい」

「そうおっしゃるな」と占星術師は言うど、ノートパソコンのディスプレイをじつと見つめて、こうつぶやいた。「仕事では権謀めぐらし、裏の仕切りも相当まかされてきたので

はないですか？ やられたらやりかえす。裏切りはけっして許さない」

男は目をすがめるようにして占星術師を見やると、コートの内ポケットから携帯電話を取りだした。ボタンを押して、左手で持ったまま耳にあてた。腕時計のクロコダイルのベルトに、占星術師は成金とは違う彼の趣味の良さを感じた。

「おお。オフクロはどうしてる？ ……ああ。悪いが、オレの母子手帳はないか、きいてくれないか。 ……ああ、母子手帳だ。ボ、シ、テ、チョーだよ。 ……おお」

しばらく無言のままだったが、目がテーブルの上の一点を見つめた。電話の語り手が変わったのだ。

「ああ。聞こえるかい？ オレの母子手帳って、持ってるかい？」

男の口調が穏やかになった。

「ない？ そうか……。オフクロ。オレが何時に生まれたか、覚えてないかい？ そう、生まれた時間だよ。 ……ああ、そう、ああ、そうなんだ。確かかい？ うん、わかったよ。ありがとう、ありがとう」

そう言って、男は電話を切り、携帯を折りたたむと、内ポケットに戻した。

「8時20分。朝のな」

「よく覚えていましたな」

「自宅でオレは生まれただろうだが、生まれる瞬間に隣の小学校で朝礼の音楽が鳴ったそう。それで、8時20分に生まれると思ったんだろう」

「はあ、なるほど。小学校がお隣なら、小学校から聞こえる音が時計替わりになりますからな。場所は？」

「場所？ だから自宅だ」

「そのお生まれになった自宅がある場所です」

「東京都渋谷区幡ヶ谷」

占星術師はパチパチとパソコンに何やら打ち込み終わると、ポンとリターンキーを押した。数秒後、占星術師の背後にあるプリンターが動き出し、何やらいろんな図やマークが描かれたA4の紙が1枚吐き出された。

占星術師はそれを手に取ると、男の前に置いた。

「これがあなたの出生図です」

男は携帯が入っていたのとは反対側、つまりコートの右側の内ポケットから引っ張り出した眼鏡ケースを開け、老眼鏡を取り出してかけた。

「あなたが生まれたその瞬間、太陽、月、水星、金星、火星、木星、土星、天王星、海王星、冥王星の10個の天体が、この天空のどこに位置していたかを記した図ですな」と、占星術師は、12分割された円の中に記されたマークを一つずつ指さしながら説明した。

「地球はないのか？」と男が聞くと、占星術師は「太陽が地球のかわりとなります」と答えた。

「この円の外側に並んでいるマークが12サインといって、牡羊座から魚座までである。この星座の名前はおなじみでしょう。で、円がオレンジの輪切りのように12に分割されており、それぞれに番号が振ってありますな。ハウスといって、1ハウスから12ハウスまでである。それから、天体のマークとマークが線でつながれていますね。これはアスペクトといいまして、特別な角度を表す。ま、これが出生図のかんたんな構造です」

「能書きはいい。オレは結論が聞きたいんだ」と男はのぞき込んでいた顔を上げ、老眼鏡をはずしてテーブルの端に置いた。

客が来出すのは夕方頃からで、ほとんどが女性だ。だから、きょうのような火曜日の午後2時という半端な時間にやってくるのは、この男のような占いなど似合わないタイプが多い。ときには営業回りの途中だと言ってサラリーマンが結婚や転職の相談に来たりもするが、とはいえ、この男のような、一見して社会的成功者の身なりとオーラを備えた相談者がやってくるのは、やはり稀だ。

「急がば回れと申しますが、しかたない。それでは結論を申しませう。あなたはすでにご自身の職業適性を十分に生かして成功を手にしてらっしゃる。いまさらその適性を聞いても、あまり意味はないのではありますまいか」

「じゃ、オレの仕事はなんだ、わかるのか？」

「第一候補。芸能プロダクションの社長さん、ですか。第二候補……」

「もういい。第一候補で当たっている」

そう言つて、男はギョロ目を落ち着きなく動かしだした。

「あんたの名前は、なんていう？」

「天の道と書いて、天道と申します」

「テンドウか」

占星術師はうやうやしくうなずいた。

「なぜ、芸能プロダクションを経営しているとわかった？」

「それは占星術の基礎的レベルの技術を備えておれば簡単です」

「もったいぶるな」

占星術師はニヤリと笑うと、男の前に置いてある出生図の、あるマークを指さした。

「この円のでっぺんのほう、10と書かれているこの10ハウスに、牝マーク（♀）があるでしょ。このマークは金星を表します。10ハウスはいわば社会的ステータスを象徴する場所。そこに美と快楽の金星が鎮座している。とすれば、旦那さんの仕事は美と快楽に関係したものとということになる。美と快楽と言っても、広い。金星はどちらかというと、深い芸術的な美や快楽ではなく、刹那的で軽薄なものを象徴している。つまり、ポップミュージックだのテレビだの、あるいはファッションや食べ物も入る。しかもこの金星は魚座というサインの中に位置している。魚座とは茫漠として境界がさだかではない、霧のような世界でしてな、ふわーっと拡散して、人々の無意識に忍び込む、そんな働きがある。とすれば、

やはり、歌やお笑い、テレビなどの芸能的なものかと推論するわけです。ここまではおわかりかな」

男はうなずいた。

「まあ、ここからは企業秘密もございますので」と占星術師はもったいぶったように言った。男の顔を下目で見た。「なるべく、結論のみを端的に申し上げるようにいたしますが、つぎにですな、あなたの太陽を見ますと、これは未来のビジョン、あるいはより普遍的なステータスを意味する11ハウスというところにある。太陽はあなたの人生の目的、あるいは実現したい自分像ということですよ。それが11ハウスにある人は、会社の中で歯車のように働くことを望まない人である。しかも野生児たる牡羊座の太陽だ。畢竟、新しいビジョンの実現を求めて、仲間と事業を興したり、独力で限界を突破したりするような生き方をすることになる」

男は腕組みをしてうなずいた。

「さらに、ええ、簡潔に申しあげますが、さらに、いわゆる金運などを表す2ハウスには拡大と成長の象徴たる木星があり、これは中年以降、大いに儲かるだろうということを表しており、なおかつ蟹座に位置し、大衆を相手に稼ぐという星回り。他に

も、月の位置だの、天王星の位置だの、もろもろを勘案し、なおかつそれぞれの天体間のアスペクト、角度ですな、それらをも総合して、わたしは第一候補として芸能プロダクションの社長さんと申し上げたわけですな」

男は、ゆっくりとうなずきながら聞いていたが、顔を上げて占星術師を見ると言った。

「なかなか興味深い。ということは、オレの人生は生まれたときにすでに決まっていたということか」

「ある意味では、その通りです」

「別の意味もあるのか」

「これは」と占星術師は出生図の上に人さし指を置いて言った。「前世の終了図でもありません」

「生まれ変わるか。そんなもの、本当にあるのかね」

「さあ、わたしにはなんとも」

「前世の終了図とはどういうことなんだ」

「あなたが前世で亡くなったときの修了証書と言いますか、地上に残した足跡と言いますか、あるいはやり残したことと言いますか、まあ、いろいろですな」

「いずれにしてもだ、今のオレの仕事は、オレの適性に合った仕事だということなんだな」

「御意。それゆえに、こうして功成り名を遂げてらっしゃるわけで。ですよね？」

占星術師は男の目の色を見た。その目は外ではなく、内へ向けられていた。

「旦那さん、どうして今さら、職業適性など、お知りになりたいのですか？ これから就職するという若者ならいざ知らず。しかも、転職する方のようにも見えません。よければ、教えてくださいませんか」

「おまえには関係ない」

「おまえ、ですか」と占星術師は苦笑した。

「そういう上から目線と言いますか、居丈高な態度というのは、本来のあなたではない。本来のあなたは非常に気配りのきく人なはず。仕事上の付き合いでは、そういう素のあなたの性格と言いますか、グラスが空いている人がいれば酒をスーッと注ぐといった社交性が大いに役立ったはずではある」

男はまた占星術師をギロツつと睨むように見た。

「おそらく、あなたのお母さまもまた社交的で優雅な女性だったのではありますまいか。

あなたのご幼少のみぎり、そう、物心ついたころより小学校にあがるころ、あなたの周囲

は賑やかで楽しく、お母さまはあなたに人一倍高価な洋服など着せてかわいがり、また大いにチャホヤされ、ある意味、何不自由ない幼児期を過ごされたのではありませんでしたか。あなたの天秤座の月がそう申しております」

男は顔を少し上にそらし、昔の記憶をたぐり寄せるように、視線は占星術師の頭のさらの上にさまよわせた。

占星術師は男の顔を注意深く観察しながら言った。

「先ほど、お母さまと電話でお話になりましたね。お元気そうで何よりです。そのお母さまのことで、あなたが小さいときに離ればなれになったことがあるのではないですか？ ご両親が離婚されて、お母さまが出て行かれたとか、あるいは、まあ、単に別居をされて、あなたと別々に暮らされたとか」

男は「どうしてわかる」と眉根を寄せた。

「占星術師ですから」と答えると、「どこに書いてある」と男は出生図を指さした。

「企業秘密になるので詳しくは申せませんが」とまたニヤリとすると、「ここここです」と占星術は2箇所マークを人さし指で示した。

「なんのマークだ」

「これが天王星。で、これが、形でわかると思いますが、月ですな。それからこの冥王星もまた」と、占星術師はアルファベットのPに似た別のマークを指さした。

「で、それがどうなんだ」

「天王星は断絶、発作、急変などの意味も持つ。月は幼少のあなたの象徴であり、あなたのお母さまの象徴でもある。この二つの星がスクエアというたいへん厳しい角度の關係にある。それと4ハウスにあるこの冥王星は、あなたのルーツ、母胎、そういうものの根底的大変化を暗示する。まあ、そういった、もろもろから推測したわけですな。付け加えれば、それがトラウマとなったかのように、あなたの私生活は安定せず、感情の浮き沈みも激しく、ときに尊大な態度をとるようにもなった、と。月と木星の關係からもそれがわかる。その尊大さは、木星の力が強まる45歳以降、とくに強まった」

男は唇をチラリと舐めて、出生図を眺めた。

「当たっていませんか？」

そう占星術師が問うと、男はゆっくりとうなずいた。

「お母さまと暮らし始めたのは、あなたが中年以降になってからですか？」

「そうだ。ひとり暮らししていたのを、家に呼び寄せたんだ。オヤジが死んでいなくなっ

たからな」

「とうことは、ずいぶん長い間、別々に暮らしていたんですな」

「もうじき25年か。おれが36か37のときに呼び寄せたから」

「お父さまとお母さまは、あなたが受胎したときにはすでに、お互いの人生の方向が別々を向いていた。不仲ということではなく、ふたりの人生の歩む方向があまりにも違い始めていたんですな。それが別離の理由かと。この太陽と、そして180度対向にある月が、それを物語っています」と占星術師は、また出生図の2箇所を順番に指さした。

「差し支えなければ、お母さまの当時のご職業を教えてくださいませんか」

男はまたギョロリと占星術師を睨むようにすると、「女優だ」とぶっきらぼうに答えた。

「なるほど。どなたですかなどと無粋なことは聞きませんので、ご安心めされ」

男の背後、赤のビロードのカーテンの向こうがざわつき始めた。雨のにおいがする。突然の雨に、傘を買い求める客で向かいの雑貨屋が混雑し始めたのだらうかと占星術師は思った。

「お母さまが女優でらしたのであれば、さぞ華やかなお宅だったでしょうな」

占星術師がそう言うのと、男は薄い唇を八の字にした。

「オフクロはオレが小学校に上がるか上がらないかのころに出て行った。だから、あまり記憶が無い。ま、オフクロ自身が華やかだったな。そういう記憶はある」

「別々に暮らし始めてからも、親子の交流と言いますか、よくお会いにはなっただんですか」

「ああ。兄弟もいないし、オヤジも忙しい人だったから、家じゃ、お手伝いのお婆さんとふたりきりでな。オフクロが仕事が休みで家にいるときは、よく、連れてってもらった、お手伝いのオバサンにな」

「近いところにお暮らしたかったですか」

「オレは幡ヶ谷でずっと育った。オフクロは点々としたが、都心に暮らすことが多かったからな。タクシーに乗りゃあ、20、30分で着くところばかりだった」

「お父様はなにを？」

「仕事か？」

「はい」

「歌手だ」

「歌手？ 歌手と女優の夫婦ですか。映画の中の出来事のようにすなあ」

占星術師はさも驚いたように上半身をのけぞらせて椅子の背もたれにあずけた。

「さぞや美男と美女のカップルだったでしょうね」

占星術師は調子に乗りすぎたかと思ったが、案の定、男の顔はとたんに不機嫌になった。

「あなたには関係ない」

「失礼をばお許しを。ま、『あなた』に格上げされたのは喜ばしいことですが」

占星術師はそれからおもむろに、牝マーク（♀）に角が生えたような印を指さして言った。

「小学校、あるいは中学もそうかもしれませんが、私立の名門校に入られましたな。おそらく男子校」

「その星からわかるのか」

「そうです。この水星、そしてこの火星から」と言いながら、占星術師はこんどは♂の印の上に指を置き、そしてまた牝マークに角が生えた印に指先を戻すと続けた。

「こちらは水星ですが、7歳から15歳頃までのあなたの象徴でもあります。同時に、これは11ハウスにありますので、あなたの仕事が若いスタッフ、ブレインに支えられているということも表しております。あなたは文章も書きますか？」

「ときどき、作詞をする」

「なるほど。とすると、ヒット曲もありますな。なぜかというに、2ハウスの木星、すなわち金儲けの木星ですが、こいつと水星がラブラブのいい関係」

「ラブラブ？」

「比喩が下品ですな。まあ、互いにエネルギーがひじょうによく流れ合うというイメージです。水星の活動によって、お金がもうかる。そういう配置です。水星とは回転の速い出来事、すばしこい若者たち、自由闊達な存在、マスクミ、口、言葉、そういうものの象徴です。つまり、あなたの配下の若者たちのマスクミを通じた活動とあなたの言葉によって、お金がもうかるということです。たんまりと。若者たちとは、あなたのプロダクションに所属する歌手やタレントさんのことかと思えます。一方で、あなたの言葉とは、あなたの

「仕事からすると、作詞であるというのは、まさにピッタリですな」

「ヒットと言っても、数曲だが」

「なんとという曲かとは聞きませんので、ご安心めされ」

男は苦笑いをした。

「小学校、中学校の話に戻れば、この水星の位置などの塩梅から見ますと、あなたは成績も良く、頭のいい友人もたくさんできました。まあ、学校生活だけを見ますと、理想的な少年時代と言えるかもしれません」

「確かに、それは言えるな」と男は腕組みをした右手であごをさすりながらうなずいた。「小中のときの級友とは今でもつきあいがある。仕事面でも、ずいぶんと世話になった。みんないい家の生まれで、いまもおのおのの斯界でそれなりの地位にいるヤツばかりだ」

「その人たちは素のあなたを知っている。あなたは気配りがきくだけでなく、面倒見がいい。だが面倒見が良すぎるあなたにつけ込む人間もいる。あなたはその悪意を見抜けない。気がつけばだまされていた。利用されていた。そんなことも頻繁にあったはず。そういう私的なところでしか見せない、あなたの愛すべき面を、少年時代のあなたの友人たちは知っている。だから、いまでもいい付き合いが続いているのですよ」

「どこでわかる」

「月です。お月様は能弁です」

男はのぞきこむようにして、月のマークの周辺をじっと見つめた。まるで手品の種を探すかのよう。

「水星が中学校までとすると、高校生から20代前半までの年月は金星が描き出します。さっきも話しましたが、これですね、これ」と占星術師は♀マークの際に人さし指を置いた。

「金星、ビーナスです。美と快樂、音曲と舞踏、食道樂に着道樂。そして恋」

男はつまらなそうに腕組みをした。

「そういう青春でした、あなたの青春は。たぶん、自分でも歌ったり、踊ったりしたのではないですか。バンドを作ったり、あるいはダンスチームを作ったり。おいしいものもたらふく食べたし、オシャレで、いつも流行の最先端のファッションできめて遊びまわった。加山雄三の若大将じゃないけれど、人が見ればうらやむような典型的な青春だ。ただし、恋をのぞいては」

「ほお」と言いながら、男はまた右手であごをさすった。

「これから、わたしはたいへん失礼なことを申し上げる。お怒りにならぬよう、まずはお

願いしておきます」

「怒らんから言え」

「周囲からは、いかなる欲望も常に満たしうる存在として、旦那さんは若者たちの羨望の的であったことでしょう。だが、一方で旦那さんの場合、女性体験はひじょうに少なかつた。恋い焦がれた女性は多くおりましたが、旦那さんはおそらく、手に触れたことすらなかつたに違いない」

「いかにも」と男は面白そうにまた出生図をのぞき込んだ。のぞき込んで、そこには男が理解できる意味ある文字は何もない。男は顔を上げて占星術師の言葉を待った。

「金星のマークにだけ、線がないでしょ。他の天体のマークには線がついていて、いろいろな天体どうしを結びつけている。さきほども言いましたが、これはアスペクトという特別な角度のことですな。ところが、ほら」と占星術師は♀マークのまわりを人さし指でぐるりと囲んだ。「一本も線がない」

「ふむ」と男がうなずいた。

「つまり、金星は孤立している。そういった特徴、はたまた魚座に位置している金星ということなどを総合的に見て申し上げた次第です」

「ふむ」とまたうなずいて、男はこんどは組んだ腕の右手のほうで鼻梁をこすりだした。

「旦那さんが要求する愛情はきわめて独特です。いや、変態ということじゃないですよ」と占星術師はあわてて手を左右に振った。男は無反応だった。

「非常にデリケートなんです、旦那さんは、愛情の面では、うーん、いわく言いがたい……。霊的などという誤解を受けそうですが、内面の非常に深い部分、その繊細な部分まで理解し、受容してほしい。神秘的な愛と申しますか、あなたの要求はたいへんデリケートでかつ困難だ。だから、なかなかひとりの女性に絞りきれず、かといって、粗暴粗雑な愛はうとまれた。野獣のような若者に周囲から見られていながら、その実、愛を求める心はあたかもまだ見ぬ霊的伴侶たるベアトリーチェを探すごとき」

男はニヤリと笑って言った。

「あなたは、いつもそうやって芝居がかったしゃべり方をするのか」

「わたしの太陽は獅子座に位置しております、獅子座の太陽は大げささで芝居がかかったことが大好きなんです。ほら、ミック・ジャガーも太陽は獅子座ですな」

「なるほど」と男はまた出生図に視線を落とすと、問わず語りにこう続けた。

「ま、ベアトリーチェには会えずじまいだったがな。そういう女はこの世にはいないんだ

よ。男の幻想だ。ま、この場合はオレの幻想だ。女房はどっちかというところとオフクロ似だな。派手好きで、社交好きだ。いい女だが、オレの心の奥深いところには入っては来れない。理解もできんだろう。なんであいつと結婚したのかと自分でも思うが、30前後になると、結婚してこそ男も一人前のように見られるからな。一人前の男に見られたくて、結婚したのかも知れない。結婚してからは惰性だ。女房には悪いがな、そういう言い方をしちゃ。だが、惰性だ。言いかえれば、慣性だ。慣性の法則の慣性だよ。ま、こっちのほうが惰性よりポジティブな感じがするな」と男は薄い唇の両端を持ち上げた。

「占星術においては、月は妻を、金星は恋人を表します。大きな声では言えませんが、わたしは男にとっては、月たる女性と、金星たる女性の、二人の異なる女性が同時に存在してしかるべきだと思っております」と占星術師はおどけたように薬指と小指の2本だけを立てた。

「愛人を肯定することか」

「さよう。月と金星が一緒の女性ですと面倒はありませんが」

「それはこのなんとか図で月のマークと金星のマークが重なっているということか」

「ご明察の通り。だいたい占星術のことがおわかりになってきたようで」

「実際、そういう男はいるのか」

「月はおよそ27日かけて地球の周囲を公転しております。この出世図を地球とすれば、27日かけてこの月のマークはこれを一周しますから、ここ、この金星を27日のうちのいずれかの日時に月は必ず通過する。すなわち、重なることとあいなる。確率的に言えば、27分の1かけるの24時間ですから、えーと、648分の1。で、ま、およそ648人にひとりはそのような幸運な男がいるということになりますな。それなりに多い」

「確かに」

「今からでも遅くはない。ベアトリーチェをお探しなさい。ヒントは旦那さんと同様、魚座のここらへんに金星がある女性です。それから太陽も関係しますな」

「どうやればそれがわかるんだ」

「気に入った女性ができたら、わたしのところに連れてくればいい」

男は初めて歯を見せて笑った。

エントランスホールのガラス扉が開くたびに、外の物音が洩れ聞こえてくる。だいたいは雑踏によるホワイトノイズのような音であり、遠くのサイレンであり、隣のファッションビルで開催されているイベントのMCの声だったりする。だが、いまは、ドーンという大きな爆発音のような音がした。

「雷ですか」と占星術師が顔をあげて言った。

男はそれには反応せず、こう聞いた。

「金星の次はなんだね」

「青春に続く年代は太陽であります。これは24、25歳ごろから35歳頃までを守備範囲としておりまして、まあ、多くの男はここで一生の仕事というものにめぐり会うことが多い。おそらく、旦那さんも、このころに起業したのではありますまいか」

「32だったか、33だったか。オヤジに出資してもらってプロダクションを立ち上げた。オヤジが後見人で、オヤジが面倒見てたミュージシャンや歌手を集めて、そこからスタート

した。オレが社長で、まわりを仲間が固めた」

男はまた過去を思い浮かべるように上目で天井のほうを見た。

「オレは大学を出てから、一度、レコード会社に就職してるんだ。親のコネを使ったわけじゃないが、親の存在が有利に働いたことは間違いない。昔、表参道に本社があったレコード会社だ。会社自体はいまもあるが、かなりの大手だ。そこに10年いた。合わなかったな。このオレが、鬱病になりそうなくらい、会社に行くのがイヤでな、まあ、組織というものになじめなかった」

「派手な業界ですから、楽しいことも多かろうと思いますけどね」

「何も無い。楽しいことなど、何も無い。だいたい、レコード会社の連中だから音楽にுவわしいと思ったら大間違いだ。自惚れてるだけで、そこらへんの高校生のほうがよっぽどいい耳を持っている。会議室で新曲のテープをかけて、これは売れるか売れないか、売るか売らないか、話し合うわけだ。オレが、これは絶対売れると主張しても、主観の問題だからね、根拠がないと一蹴だ。若いし、親のコネで入ったと思われてるしな。なんの力も無い。最後は部長と課長のなあなあで決まる。会議など、開いても意味は無い。まあ、ギャングブルなんだよ、レコード会社なんぞ。百人のアーティストを売り出せば、ひとりぐらいは

売れる。みんなでおこぼれをちょうだいする。そういう構造だ」

「でも、きれいな歌手やタレントさんにもしょっちゅう会えるわけですな」

「そのどこが面白い。きれいな歌手だってタレントだって、化粧と衣装を剥いでしまえば、ただの阿呆だ。それこそ、でくの坊だ。人がいいヤツはいるかもしれないが、尊敬できるヤツ、偉大だとひれ伏したくなるヤツ、そんなもんは一人もいない。いや、いるかもしれないが、限りなく少数だ」

「そんなものですか」

男は腿の上で両手を開き、手のひらをぼんやり眺めながらこう続けた。

「入社3年目で制作から宣伝に回されたよ。チラシと見本盤を持ってマスコミまわりだ。毎日、毎日。朝から晩まで、北海道から沖縄までな。人生でもっとも屈辱的な日々だな、おれにとっての。だが、そういう仕事が好きって野郎もいるんだよ、世の中には。面白いもんだ」

「それで独立された、と」

「オヤジに借金してな。レコード会社で知り合った仲間と、大学時代からの仲間と、みんなだな。面白かったよ。最初のころは。自分の城を持ったみたいだな。だが、もちろん、

芸能界はそんなに甘いところじゃない。あんたが最初に言ったように、権謀をめぐらし、だまし、罠にはめ、脅し、つぶし、金で買い、女で落とし、まあ、いろんなことをした。社長のオレがもっぱら裏の仕切りをした。仲間たちには、そういう汚いことはさせたくなかった……。あんた、そういうのも、このナントカ図には出ていたのか」

占星術師は大きくゆっくりとうなずくと、人さし指をひらがなの「ち」に似たマークの上に置いた。

「これは土星です。蠍座に位置している。この蠍座の土星が旦那さんがいまおっしゃったことをすべて表しております」

男はまた出生図をのぞき込んだ。

「蠍座は水のサインでして、水というものはどんな形の器にも入り、かつ、どんなすき間にも流れ込む。また、二つの器に入っている水をまぜれば、それこそ一体となつて一なるものとなる。蠍座は、そういう水のように、相手に浸透し、情感的に一体化するというものがその一般的な働きです。『蠍座の女』という歌がありますな。歌詞に、地獄の果てまでついていくってえ箇所がありますが、ま、なかなか蠍座の特徴を言い得ているものだとわたしは思います。つまり、相手と自分が一体化するためには手段を選ばないのですな」

占星術師はいったん言葉を区切ると、考えを整理するように視線を落とした。

「ええ、そのう、言いかえるならば、自分に欠落しているものを他者と一体化することで手に入れようとするわけです。そのためには法律も倫理も相対的なものとして排除される。それが蠍座の本質。で、この場合の他者とは人間とは限りません。国家であったり、組織であったり。一体化のためには死をいとわないこともある。死とは自分の死でもあり、あるいは相手の死でもある」

男は視線をびくとも動かさず、唇を一字に結んで占星術師の話聞いていた。

「この蠍座の土星があるところは、6ハウスです。ここは労働を象徴する場所。10ハウスは社会的ステータスとしての職業、それに対して、この6ハウスは仕事の具体的な中身、つまり業務、労働を表します。で、ですな、土星というのは抑圧、圧政、規律、調整、節制、反復、あるいは乾燥という意味がある」

占星術師はまた言葉を区切り、下唇を歯でかんで腕を組んだ。それからこう続けた。

「つまり、あなたがなしてきた労働とは、激しい言葉ですが、相手を食べて消化するためには手段を選ばず、権謀術策にはかりごとをめぐらし、冷酷冷徹に、繰り返し繰り返し、詩的に言えば、相手を象徴的に殺し続けることだったと言えるわけです。まあ、ビジネス

ス上ということですが」

そう言って占星術師はひじをテーブルについて手を組み合わせ、男の顔を上目で見た。

男は占星術師の視線を避けるように、目を閉じ、腕組みをした。

「当たってるな」

男はつぶやくように言った。

「旦那さん、お聞きしたいのですがね、おじいさまはいらっしゃいましたか」

「祖父のことか」

占星術師がうなづく。

「祖父は、オレが小さい頃に死んだ。親父の側も、オフクロの側も。だから、ほとんど記憶がない」

「なるほど。この土星は祖父の象徴でもありますが、場合によっては、父親ということでもある。一般的には太陽を父親として解釈しますが、旦那さんの場合は、太陽としての顔を持った父親と、土星としての顔を持った父親がいるということになるでしょう。つまり、旦那さんにとって、旦那さんのお父様とは太陽と土星の二つの顔を持つ分裂した存在だったということになりますな。実は、ここからが、わたしが旦那さんの出生図を見た瞬間に、

もつとも関心を持ち、もつとも案じたところなのですが」

占星術師は真正面から男を見つめた。男はまたしてもその視線を避けるように目を閉じた。

「お聞きしますが、あなたはお父様から虐待のような目であってはおられなかったか」

男の薄い唇がかすかに震えた。

「旦那さんのお父様はなんとという歌手であったか存じ上げませんが、おそらく、スターのように輝き、自由を謳歌し、創造的で、今風に言いますればセレブな友人も数多くいた。

そんな輝かしい憧れの男性像としてのお父様がいます。一方で、躰けに厳しく、また勉強にもうるさく、何ごとにおいても制限を加えたがり、自由な振る舞いを許さず、言うことをきかないと激しく狂ったように暴力を振るう、そういう恐ろしい暴君としてのお父様がいます。その二つの間で引き裂かれるようにして、旦那さんは辛い少年時代を過ごしてきたではありませんまいか。旦那さんが離れて暮らしているお母様の家を訪れるときも、おそらく、お父様に見つからないように万全の注意を怠らなかつたはず」

男が目を開けた。その目にかすかだが怒りの色がさしている。

「お見事だな。まるでナントカ探偵みたいだ。そうやってオレの過去をほじくり返すのは

愉快か」

占星術師が答えた。

「旦那さん、あなたがわたしに相談したいことは、職業適性なんかじゃないでしょう」

男がギョロ目を細めた。

「ご自身がお父様から受け継いだ暴力性が引き起こした、何らかの出来事をめぐることどもを占ってほしい。そう考えてここに来たはず。だから、わたしはまずは過去から順に話をしたんですよ。因果応報。因がわからなければ果もわからない」

占星術師は出生図のマークに人さし指をおきながら言った。

「これが火星、これが冥王星、これが土星。この3つの天体を結ぶ線が冥王星を90度の頂点にした直角三角形を形作っている。まさに、これぞ陰湿なる暴力性の極みという図なのでありますな」

占星術師は出生図から顔を上げ、静かに椅子の背にもたれかかった。

男は何も言わず、ただ出生図を無表情で見おろしていた。

占星術師は男に向かってひそやかな声音でこうたずねた。

「旦那さん、その出来事はおよそ25年前に起こったのではないですか」

男は口内にあふれ出たツバを気づかれないようにゆっくりと飲みこんだが、のど仏が上
下するのは隠せなかった。

「心配は無用。男、天道、口の堅さも日本一ですぞ」

占星術師はそう言って唇の端をあげた。

5

「ノストラダムスはご存知ですな」と占星術師が言うと、男は小さくうなずいた。

「ノストラダムスはデルファイの神託で使われたような水盤の上にビジョンを見たそうです。そこに見えた出来事がいつ起こるのかを確定するために、占星術を使いました。天体
というのは時計以上に正確な動きをします。まあ、宇宙自体が一つの時計と言えますな。
だから、たとえば、二千年年の何月何日に冥王星は天空のどこにあるかなどというのは、

計算すればただちにわかります。占星術師は、未来の予測だけでなく、過去に起きた出来事の日時も、この星の進行から計算して割り出すのです。おわかりいただけますかな」

男はまたしても小さくうなずいた。

「毎日、こうして鑑定していると、頭の中に簡単な天文歴のようなものができてしまっていますな、とくに木星以遠の公転周期が長い天体は、何年ごろには天空のどこそこにいたかと、だいたい覚えていっているものなんです。旦那さんの太陽は牡羊座の16度の位置にあります。実は誕生日をうかがった瞬間、この方の人生の大転機が始まったなと思いました。図でお見せしましょう」

そう言って、占星術師はパソコンのキーを二三回叩き、それからリターンキーを押した。プリンターから出てきた紙を取り上げ、出生図の上に置いた。

「これが経過図というものですな。出生図とそっくりですが、よく見ると円の外側にもマークがついているでしょ。これが今現在の天空における10天体の位置です。重要なのは冥王星です」

占星術師は円の右側に印字されているPに似たマークの際に人さし指を置いた。

「この冥王星が、旦那さんの出生図の太陽とまさに90度の角度を作りなっています。冥

王星の公転周期はおよそ248年。人間の寿命の3倍ですな。計算上、ある人の出生の太陽に天空を進行中の冥王星が90度の角度を作るのは人生で一度のみとなる。ということは、旦那さんにとって今生で初めての冥王星と太陽の90度の体験とあいなります」

「それにどういう意味があるんだ」と男がまだるっこしそうに聞いた。

「冥王星は太陽系外からの力を地上にもたらす働きをいたします。その力は激越で、正しく用いれば爆発的な成功をもたらし、あやまって用いれば災厄をもたらす。だが、その力は普通の人間には強大すぎてまず制御不能。多くの人は、ゆえに、災厄の憂き目にあうこととなる」

男は「それで」と先を促した。

「旦那さんの人生における一大転機が始まったと、まず、心にお留めください」

男は無表情のまま経過図に視線を落とした。

「次に」と言い、占星術師はノートパソコンを少し時間をかけて操作すると、またプリンターがジージー音を立てた。

占星術師はそのプリントアウトした1枚を取り上げると、自分の目の高さで広げて確認し、それからゆっくりとテーブルの上に置いた。

占星術師は男の表情を観察するかのように視線を向けたまま、こう言った。

「これも経過図ですが、過去のとある日のものです。左上にその年月日を書いてあります」
男はテーブルの端に置いていた老眼鏡をかけると、経過図に顔を寄せた。その日付がいかに特別なものなのか、男は魅入られでもしたかのように、しばらくのあいだ、経過図から顔を上げなかった。

やがて大きな息を一つつきながら上半身を起こすと、男ははずした老眼鏡を手で弄びながら、何ごとかを一心に考えた。

占星術師は男の言葉を待った。

男が口を開いた。

「で？」

「天空を進行中の冥王星が、旦那さんの火星、冥王星、土星の直角三角形と交じり合った、その前後ひと月のあいだの出来事。それが何かは、わたしには想像力によってのみぼんやりと描くしかありませんが、当事者たるあなたはもちろんすべてを知っております」

男は目を閉じた。

「その話をする前に、まずは旦那さんの火星についてお話をしてもらいたいですかな。こ

の星です」

占星術師は♁マークのところに入さし指を置いたが、男は目をつむったままだ。

「火星は男性性、活動力の象徴であるとともに、攻撃性、暴力を象徴する天体であります。旦那さんの火星は12ハウスに入っております。12ハウスは本来、非常に精神的、霊的な場所でありますが、未分化な状況においては、影、シャドーのような世界ともあいなります。そこに火星が位置する人物は、攻撃性や怒りを抑圧し、内向させます。180度対向にあるあの蠍座の土星が、その火星をさらに抑圧し、配下に置こうといたします。火星は陰湿な攻撃性を強め、爆発の時を待つ。そして、その二つの星と90度の関係にある冥王星。これですな」

占星術師は円の下部にあるPのマークを指で指し示した。男は目を開けてその示すところをぼんやりと見つめた。

「この冥王星が激越で不可解な力を、火星と土星が理解できぬままに注ぎ込む。軽自動車にF1のエンジンを無理やり積むようなものですな。あるいは、セスナ機にロケットエンジンを搭載する。つまり破滅的な推力だ。あるきっかけがあれば、この抑圧された攻撃性は破壊的なまでに発揮される。いったん点火されたら、もうもとはには戻らない。そういう

暴力性を、あなたは生まれたときから持っておられる」

男は占星術師をじっと見つめると、こうたずねた。

「その暴力性を鎮める方法はあるのか」

占星術師が言った。

「あなたの人生そのものが、その方法です」

男は眉根を寄せ、かすかに首をかしげた。

「あなたは暴力を体験し、それを鎮めるために生まれてきた。そういうことです。暴力的であることに最も苦しみ、最も直面し、最も戦ってきたのはあなた自身ではないですか。だから、あなたの人生そのものが、あなたの残酷な暴力性を鎮める方法そのものなのです。言いかえるならば、一人の人間の人生は、地上の倫理など超越しておるんですな」

「語るのも恥ずかしいが」と男は腿のうえで両手を組み、目を閉じた。「中学校までは、ヤンチャな坊主で済んだ。怒りを抑えられなくてケンカはしたが、残酷なことはまずしなかった。高校に入ってからかな、自分とは残酷で下賤な人間ではないかと思ひ悩むようになった。オレにも二面性があった。芸能人の息子という華やかな面。それともう一つ、陰湿に他人を脅し、破滅へと導く悪魔的な面だ。高校時代は、ネチネチとした意地悪や、夕

イマンはっても素手の約束を反故にして、バットだのナイフだのを使ってボコボコにしたりとかな、その程度で済んだ。エスカレーターしたのは大学に入ってからだ。気に入らないやつのクルマに火は着けるは、不良に金を渡して半殺しにさせるは。女だって容赦はしなかった。陰湿だよ。ずっとずっと胸ん中にためていた怒りが腐ってメタンガスみたいになつて、そのガスに突然火が着くと、もう停まらないんだな。自分でやつつけるか、チンピラに頼むか、とにかく、身体中いっぱいに充満した怒りを破裂させないかぎり、生きてはいけないという気持ちになるんだ。そして、あとで落ち込む。死んでしまいたいほど落ち込む」

占星術師はゆっくり頭を前後に振りながら男の話を聞いていた。男が言葉を切ると、占星術師は腕を組み、何ごとか思い巡らせるように天井を仰ぎ、そしてこう言った。

「これから申し上げることは、わたしの想像です。おそらく正確ではありません。ですから、間違っていたら、お詫びいたします」

占星術師は一番上の経過図の右端のあたりを指さし、語り始めた。

「1991年1月。あるいは12月だったかもしれない、あるいは2月だったかもしれない。いずれにしてもそのころに、あなたの残酷な暴力性にそのピークがやって来た。会

社の経営やお母さまのことなどで、あなたはお父さまと衝突を繰り返した。自分で会社を経営し始めた一国の主であるにもかかわらず、あなたのお父さまはあなたを制御コントロールしようとし、あなたが言うことを聞かなければ、お父さまの息がかかったタレントを引き上げたり、実力行使もいとわなかった。そして、ある日、あなたは爆発した」

占星術師は語ろうとした言葉を呑み、男を見た。男は平静な表情で目を閉じていた。占星術は飲み込んだ言葉を、また口に出した。

「そして、お父様を殺した」

男は依然と目を閉じたまま無言だった。

「あなたは殺人の時効が25年だと思っている。だから、その時効が近づいてくると、自分の犯行が隠せおおせるかどうかが心配になってきた。それで、わたしのところに来る未来を聞きにやってきた。違いますか？」

男はゆっくりと目を開けると、かすかに笑みを浮かべた。

「数年前に法律が変わって、殺人には時効が無くなった。そんなことぐらい、知っている。だから最後は、あんた、間違ったが、途中までは、まあ、おおよそ、近いかもしれない」

「近いかもしれない、ですか」

「ああ」

男は経過図の上に目を落とし、話し始めた。

「1991年の12月だ。師走のあわただしいときだ。週刊誌だのスポーツ新聞だのに、オヤジの記事がでかどと出た。スター歌手、割腹で自殺未遂とな」

「割腹？」

「切腹だよ。オヤジが切腹して自殺未遂したと。オヤジは半年ばかり入院して、結局、切腹とは関係の無い肺炎で死んじまった」

男はその薄い唇をかすかにとがらすと、何かを思い出そうとするように首を何度か前後にこきざみに振った。

「自殺未遂じゃなかった。オレが果物ナイフで刺したんだ。理由はあんたが言ったようなもんだ。その晩もオヤジはオレを怒鳴りつけた。たまっていた、怒りがな。何年分もたまっていた。オレは発作的にテーブルの上にあった果物ナイフを手に立ち上がると、ソファに座っていたオヤジに突進していった。そこにはオヤジのマネージャーもいたが、かまうもんかと思つた。オヤジの腹にナイフを突き立てた。でもな、果物ナイフだからな、オレは思いっきり刺したが、致命傷にはならなかった。マネージャーが救急車を呼んだ。すると、

オヤジが苦しそうな顔をしながら言ったんだよ。ミヤケ、オレは割腹自殺したんだ、いいな、オレは割腹自殺したんだ、わかったな。そう言った。ミヤケというのはマネージャーのことだ。そしてオレにもこう言ったんだ。わかったな。オレは自殺しようとしたんだ。オレは自殺しようとしたんだ。これがオレの最後の命令だ。あとはもう何も言わん。これはオレの自殺だからな。いいな。そう言ったんだ。オヤジは救急車が来るまで、果物ナイフの柄をしっかりと握っていたよ。切腹したように見えるようにな」

「立派なお父様ではないですか」

「立派かね。立派かね」と、ひとりごとのように男は言った。

「それ以来、オレは人を肉体的に傷つけてはいない。さっきも言ったが、仕事のためにはさんざんばらひとの心は傷つけてはきたがな。だが、殴ったり、け飛ばしたり、刺したり、燃やしたり、そういうことは一切していない」

占星術師は、フーツと大きな息を一つつくと言った。

「そうでしたか」

男は腿のうえで両手を組み合わせ、まるで何かを祈るかのように、しばらくじっと自分の手を見つめていた。

それから手をほどこき、顔を上げ、右手の人さし指を占星術師に向けて振りながらこう言った。

「あんたはよく当たる占い師だ。オレはお世辞抜きで、そう思う。そんなあんただが、なんでオレがここに来たか、それだけは最後までわかってくれなかったようだな。言っておくが、おれはほんとうに自分の適性を知りたくてここに来たんだ」

「適性……」

「そうだ。一番最初に言ったらう。オレの適性を見てくれとな」

「へ、へえ」

「今の仕事はもうあきあきだ。権謀術数も疲れた。会社を仲間に譲って、違うことを始めようと思っっている。普通の企業じゃ定年退職の年にも近づいているしな。だから、次はどんな仕事を立ち上げるのがよかろうかと。それを知りたくてな」

「いや、これは失礼をば」

男は薄い唇の端をあげて、ほほ笑んだ。暴力性が宿っていると感じたその唇の薄さが、いまは率直さの証しのように思えた。

「また、出直そう」

腕時計を一瞥した男はそう言って立ち上がると、「いくらだ」と言った。

「きっかり1時間ですので、1万円でございます」

財布からピン札を一枚取り出すと、男はテーブルの上に置いた。

「ありがとうございます」と占星術師は頭を下げ、「領収書は？」ときいた。

「いらん」

そう言うと男はおもむろに右手を占星術師に向かって差し出した。

占星術師は一瞬、男の求めるものが何かわからなかった。占星術師は自分も立ち上がる
と、右手を差し出した。出生図や経過図の上で、二人は握手をかわした。

「旦那さん、あなたのヒット曲を教えてくださいませんか」

「次に来るとき、CDを持ってくる。それでいいかい」

「御意」

男は回れ右をすると、赤いビロードのカーテンをシャーと引き、そして出て行った。

地下フロアの通路を歩き交う若い女性たちの足もとが雨で濡れていた。

(太田 穰)